



# 猫の混合ワクチン接種のご案内



ワクチン接種前に必ずお読みください

## 混合ワクチンの種類

1. 猫ウイルス性鼻気管炎
2. 猫カリシウイルス感染症
3. 猫汎白血球減少症 3種混合ワクチン
4. 猫白血病ウイルス感染症
5. 猫クラミジア感染症 5種混合ワクチン



## ワクチン接種までの手順

1. 問診（体調や病歴の確認）

副反応の病歴がある患者さんは、事前にお申し出ください。

### 副反応の例

注射部位の腫脹や疼痛、顔面腫脹（ムーンフェイス）、発熱、掻痒（かゆみ）、下痢、嘔吐、食欲減退、咳、アナフィラキシーショック、死亡例も報告されています。

2. ワクチン接種前の身体検査
3. ワクチン接種
4. ワクチン接種後に、待合室やお車などの安静にできる場所で **20分以上体調を観察**してから帰宅していただきます。（病院から出るときはスタッフまでお声かけ下さい）
5. ご帰宅後は、下記の注意点を厳守してください。
  - ・ 2-3日は安静に務め、シャンプーや激しい運動は避けてください。
  - ・ レボリューション、フロントライン、フィラリア予防薬などの投薬は、2-3日してから行ってください。

## 過去に副反応を経験した場合

1. ワクチンの種類を見直し、適切なワクチンを接種します。
2. 副反応を起こりにくくするお薬を、事前または同時に投与してワクチン接種を行うことがあります。
3. 事前に代表的な感染症のワクチン抗体を測定し、感染症発症防御能を判定することがあります。
4. ワクチン接種を避けます。

## 下記の患者様は予防接種を避けます

1. 身体検査で、健康状態に問題があったり、高齢でワクチン接種が困難とみなされた場合。
2. 免疫抑制剤などワクチンに影響する治療を受けている。
3. てんかん発作の既往歴がありコントロールできていない場合。
4. 過去に重度の副反応が認められた場合。
5. 狂犬病ワクチンなど不活化ワクチンを接種して1週間に満たない。
6. 混合ワクチンなど生ワクチンを接種して1ヶ月に満たない。
7. 過剰に興奮し抑止が出来ない。
8. ワクチン接種後に動物の様子を観察できない。
9. 妊娠中、発情中、授乳中、アレルギー体質。
10. 病院の受付時間が残り30分に満たない時間帯の接種は、お勧めしかねます。



裏面をご覧ください

## 参考資料

### 混合ワクチンの使用説明（ワクチン使用説明書から一部抜粋）

#### 【用法及び用量】

猫の皮下又は筋肉内に1mlを注射する。

#### 【猫に対する注意】

##### 1 制限事項

(1)本剤の注射前には健康状態について検査し、重大な異常を認められた場合には注射しないこと。また、次のいずれかに該当する場合は注射しないこと。ただし、対象猫が猫ウイルス性鼻気管炎、猫カリシウイルス感染症及び猫汎白血球減少症に感染するおそれがあり、かつ、本剤の注射により著しい障害をきたすおそれがないと認められる場合には、慎重に注射すること。

- ・妊娠期及び授乳期のもの。
- ・寄生虫に感染しているもの。
- ・重篤な疾病にかかっていることが明らかなもの。
- ・以前に本剤又は他のワクチン投与により、アナフィラキシー等の副反応を呈したことが明らかなもの。

(2)対象猫が、次のいずれかに該当すると認められる場合は、健康状態及び体質を考慮し、注射適否の判断を慎重に行うこと。

- ・発熱・咳又は下痢などの臨床的異常が認められるもの。
- ・疾病の治療を継続中又は治癒後間がないもの。
- ・明らかな栄養障害が認められるもの。
- ・高齢のもの。
- ・重度の皮膚疾患が認められるもの。
- ・他の薬剤投与後間がないもの。
- ・導入又は移動後間がないもの。
- ・飼主の制止によっても沈静化が認められず、強度の興奮状態にあるもの。

- ・1年以内にてんかん様発作を呈したことが明らかなもの。

(3)副反応（アナフィラキシー等）による事故を最小限にとどめるため、本剤の注射後しばらくは観察を続けること。帰宅させる場合は、なるべく安静につとめながら帰宅させ、当日は帰宅後もよく観察するよう指導すること。

(4)注射前日及び当日から2～3日間は安静につとめ、激しい運動、交配、入浴又はシャンプー等は避けるように指導すること。

##### 2 副反応

(1)本剤の注射後、ときに一過性の副反応（発熱・元気・食欲減退・下痢・嘔吐・注射部位に軽度の疼痛、発赤、熱感、掻痒、腫脹、及び硬結）が認められる場合がある。

(2)過敏体質のものでは、ときにアレルギー反応〔顔面腫脹（ムーンフェイス）、掻痒、じん麻疹〕又はアナフィラキシー反応〔ショック（虚脱、貧血、血圧低下、呼吸速迫、呼吸困難、体温低下、流涎、ふるえ、痙攣、尿失禁等）〕を起こすことがある。アナフィラキシー

反応（ショック）は本剤注射後 30 分位までに発現する 경우가多く見られる。

(3)猫において、不活化ワクチンの注射により、注射後3か月～2年の間に、まれに（1/1,000～1/10,000 程度）繊維肉腫等の肉腫が発生するとの報告がある。

(4)副反応が認められた場合は、獣医師の診察を受けるように指導するとともに、副反応に対して適切な処置を行うこと。

##### 3 相互作用

(1)本剤には他の薬剤（ワクチン）を加えて使用しないこと。

(2)本剤と他のワクチンとの同時投与は避けること。また本剤注射前に他のワクチンを投与している場合には生ワクチンにあつては4週間以上、不活化ワクチンにあつては1週間以上の間隔をあけること。なお、本剤注射後他のワクチンを投与する場合には、1週間以上の間隔をあけること。

##### 4 適用上の注意

(1)移行抗体価の高い個体では、ワクチンの効果が抑制されることがあるので、子猫への注射は移行抗体が消失する時期を考慮すること。

(2)本ワクチンあるいはフェロボックス5注射後の追加注射用として本ワクチンを使用する場合は、1mL（1パイアル）を1回筋肉内又は皮下に注射すること。なお、追加注射は1年毎に実施することを推奨する。

(3)注射器具は、滅菌又は煮沸消毒されたものを使用すること。薬剤により消毒した器具又は他の薬剤に使用した器具は使用しないこと。なお、乾熱、高圧蒸気滅菌又は煮沸消毒等を行った場合は、室温まで冷えたものを使用すること。

(4)ワクチン瓶のゴム栓は、70%アルコールで消毒し、滅菌済みの注射針をゴム栓から刺しこみ、ワクチンを注射器内に吸引して使用すること。ゴム栓を取り外しての使用は雑菌混入のおそれがあるので避けること。

(5)注射部位は70%アルコールで消毒し、猫の疼痛感を和らげるためアルコールがある程度乾いてから注射すること。注射時に注射針が血管に入っていないことを確認してから注射すること。

(6)注射器具は1頭ごとに取り替えること。

(7)注射部位を厳守すること。

(8)猫において、注射部位に硬結や腫瘍が持続的に認められた場合は、獣医師の診察を受けるよう指導すること。

(9)猫において、不活化ワクチンを同一部位へ反復注射することにより、繊維肉腫等の肉腫の発症率が高まるとの報告があるので、ワクチン注射歴のある部位への注射は避けること。



## 七里動物病院

埼玉県さいたま市見沼区東門前 17-9

TEL : 048-687-2490 【受付時間】 AM9:00～11:00・PM4:00～6:00

<休診日> 火曜、日曜午後、祝日午後、第3木曜午後

## どうぶつの総合病院 救急救命科 夜間診療部

埼玉県川口市石神815（R122号沿い）

☎ 048-229-7299 【受付時間】 21:30～翌3:00

裏面をご覧ください